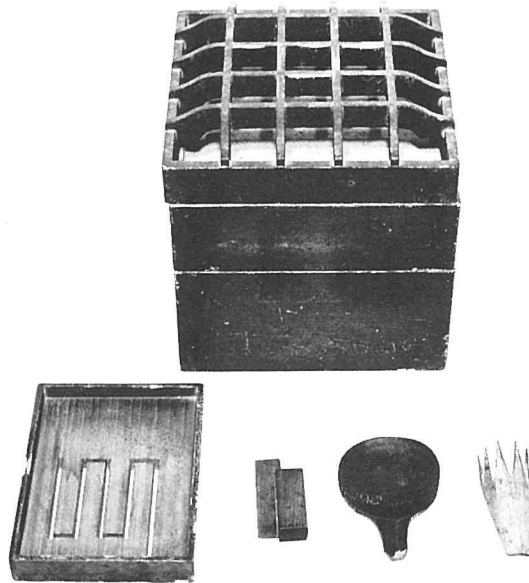


# 民俗博物館だより

Vol. XII No. 2

1985. 10. 10



時香盤 (生駒市高山)

## 目次

特別テーマ展「水と生活」によせて (特別テーマ展特集) ……	1
布留川流域の水利慣行 (特別テーマ展特集) ……	2
溜池と水利慣行 (特別テーマ展特集) ……	4
雨乞い (特別テーマ展特集) ……	6
弁財天への信仰 (特別テーマ展特集) ……	8
箸尾の弁天さん (民俗資料調査抄報⑳) ……	10
おしらせ、他 ……	11

## 「水と生活」展によせて

山本 實

今回の特別テーマ展は、地形、風土からの厳しい自然条件を克服するために私達の先人が創意工夫を重ね積み上げてきた水とのかかわり、即ち、「大和の水の歴史」について、資料（史料）の調査、収集に努めてきたが、今回その成果の一端を展示することとなった。

### ○はじめに

元来、大和の農耕地帯は、灌漑用水期に降雨量が少なく河川の水利にも乏しいなど農業生産、就中、主要食糧である水稻の栽培には欠くことのできない灌漑用水の確保に私達の祖先が腐心し、言語に絶する苦勞を重ねられた史実は、限られた分野での調査、収集した資、史料においても明らかである。

これらのことは、極く最近まで大和の各地で続けられてきたが、吉野川並びに宇陀川の分水事業により、ようやく「水との闘い」から解放されたと云えるのではなからうか。

今年の夏季は、極めて降雨量の少ない酷暑に見舞われたが、一部の地域を除き生活用水はもとより、灌漑用水にも全く心配もなく安穩に過ごすことができたのも、前記両河川の分水事業の成果によるものと云わなければならない。と同時に歴史的なこの事業を企て、事業の遂行に心血を注がれた先覚者、関係者の御心勞の程は、永劫に忘れてはならないのである。

### ○県下の用水源の概要

古来から大和では、しばしば干ばつに見舞われその対策として溜池の築造、河川の分水の企てなどに鋭意努められてきたのである。

このことは、後述にその事例を挙げることにするが、大和の用水源の最近の実情をみておきたい。

県下の農業用水源を大別すると、河川灌漑が約39%溜池灌漑が58%で、その溜池数は13,700余、奈良盆地のみでは溜池の灌漑率は70%余に上っており（以上、昭和28年調査、堀井甚一郎著、奈良県地誌より引用）いかに自然条件が厳しかったかが窺えるのである。なお、上水道源についてみてみても供給開始後、

日の浅い県営水道の占める割合は、昭和58年度に40%に達しており、これは、吉野川、宇陀川の両分水事業の寄与が極めて大きいことを証明している。

### ○灌漑用水確保の歴史

農耕、就中稲作に欠くことのできない用水の確保には、古来から大和の各地で種々の企てがなされその実現に努められたことが窺われる。即ち、溜池の築造にはじまり河川の分水の企て、灌漑用具の工夫などに当時の先覚者達は英知を傾け、苦勞をおしまれなかったのである。

大和では、既に西暦 300年代から飛鳥地方を中心に溜池の築造がはじまり、以降、各地で盛かんに行われた記録が認められ、これらのことは、白川溜池(1933年—昭和8年完成)倉橋溜池(1960年—昭和35年完成)の例に見られるように、極く最近まで続けられてきたのである。また、大和には河川の分水計画、あるいは水利慣行のとりきめ、水争いなど、「水」にまつわる事象が比較的多いようであるが、その2～3の史実についてみると、1584年—天正12年の布留川分水、1617年—元和3年の廣大寺池の水利慣行のとりきめなどがあり、1701年—元禄14年及び1798年—寛政10年の吉野川分水計画、1863年—文久3年の宇陀川分水計画がみられるのである。同じく1701年にはいわゆる水越峠の水論がおこっている。一方用水路の水を高い耕地に導くための農具も工夫され、寛文年間(1661年)以前から龍骨車を使っており、この時期に踏車が考案され各地に普及したようである。(大蔵永常著、『農具便利論』より引用)

当館では、多数の灌漑用具を収集し、その一部を展示しているが、中には「慶応四年六月」の銘のある水車も含まれている。

(館長)

# 布留川流域の水利慣行

浦西 勉

竜王山(585m)に水源を持つ布留川は、天理市滝本の字「一ノ井」で水量を二分して下流の村々へ、主に農業用水として分割されていく。「一ノ井」で分かれた川は、北と南に流れ、北に流れる川沿の村々を布留北郷とよび25ヶ村が存在し、南に流れる川沿には布留南郷と言われ29ヶ村がある。同一の水源を持つ下流の村落が54ヶ村と密集しているところから、当然こまかな水利慣行が存在していて、それがこの川の特徴としてある。この布留川の水利慣行に関していくつかの論文や報告書<sup>注①</sup>があり、それぞれ重要な問題を提示している。それらの論文や報告書以上の知識は今のところ持ちあわせていないが、ここに少し今回調査した二つの事項について報告することにする。

## (1) 布留川の五月卯の日の川掘りの風習

布留川では毎年五月の卯の日に川掘りという風習が存在している。これは北郷、南郷ともにある。この日、下流の村から上流へ自分の村の水利権のある場所まで川掘りをする。用具は備中、鍬、スキ、鎌でそれぞれ川岸を美しくし、堰を確めるのである。この風習の中で、布留川の北を流れる菅田川の場合を報告する。この川は、菅田、上之庄の村の人が水利権を持つものでそれぞれの村から「一ノ井」近くまでの約4km上流まで川掘りをする。毎年上流の村々へヨイブレ（実際は前々日にくる）として上之庄1人、菅田1人が各村々

の総代の家に川掘りの日を伝えにくる。例えば豊田では、ヨイブレの人を土間につきでた板エンに座ってもらい、トーフの醤油かけとチシャのゴマあえをさかなにし1升の酒をふるまうのが定りとなっている。川掘りの当日には菅田、上之庄の人達はホラガイを吹き上流にやってきて、平等坊か杉本で昼食となり、最後は豊田の土木までやってきて完了し、そして布留の宮さん（昔の良因寺、巖島神社）にて豊田の人がふるまいをする。上之庄が東に座り菅田の人が西に座る。豊田からは化粧樽1対とワカメ一貫目とを持ってゆきふるまうのが定りであった。また大豆の塩炊きがさかなとなっていた。この風習は今も少し残っているが、戦時中までは古来通り行われていたと言う。

上記の風習を紹介したのは、一つは、旧歴九月一日に布留郷内の榜示<sup>ぼうし</sup>凌<sup>りょう</sup>（今は形式的）とこの五月の卯の日の川掘りとが一対をなしているのではないかと考えるのであり、もう一つは、この川筋で行われる「野神まつり」（岩室、平等坊など）との関連があるのではないかと考えたからである。

## (2) 番破れの事

布留川ではよく番破れということを聞く。「一ノ井」で水量を二分し、北側へ流れる川は三島村が、南側へ流れる川は勾田村、田村の三ヶ村が立合いのもとで分水する。その方法は川底に「分木」を敷き、川巾を土俵で平



▲番水札（天理市豊田）



▲布留川北流の村内へ流れる水（天理市西井戸堂）

等に分ける。そしてその時一番札を立てておく。これを第一回のアイデアゲと言う。その年、さほど雨が降らない時は一番札もそのまま、下流では乏しい水を有効に分ける努力をしなければならない。しかし、大量に雨が降ると立てられた一番札も土俵も流される場合がある。この場合、三島、勾田、田村の人も三日間、土俵をあげるができない。三日後にそれぞれ一番札を立てた時と同じように川巾を定めて土俵をつむ。この時二番札を立てる。大水が出た時の下流の村々では必要な水を溜池や水田に引入れ余分な水は下へ流す。一番札が流れたことを知った下流の村では、その水を確保するためあわただしく準備をすと言う。次に二番札が大雨で流されると1日下流へ水を流しっぱなしで次の日、三番札を立てにゆく。三回目の大雨がきて、三番札が流れると、その日のうちにアイデアゲをする。このような定りがある。これをみると一番札がずっと立っている年はかんばつの年であって番札が流れる年は水が多くある年であって、川の水を有効に使うシステムができあがっていることがうかがえる。

注(1)『日本灌漑水利慣行の史的的研究』喜多村俊雄著

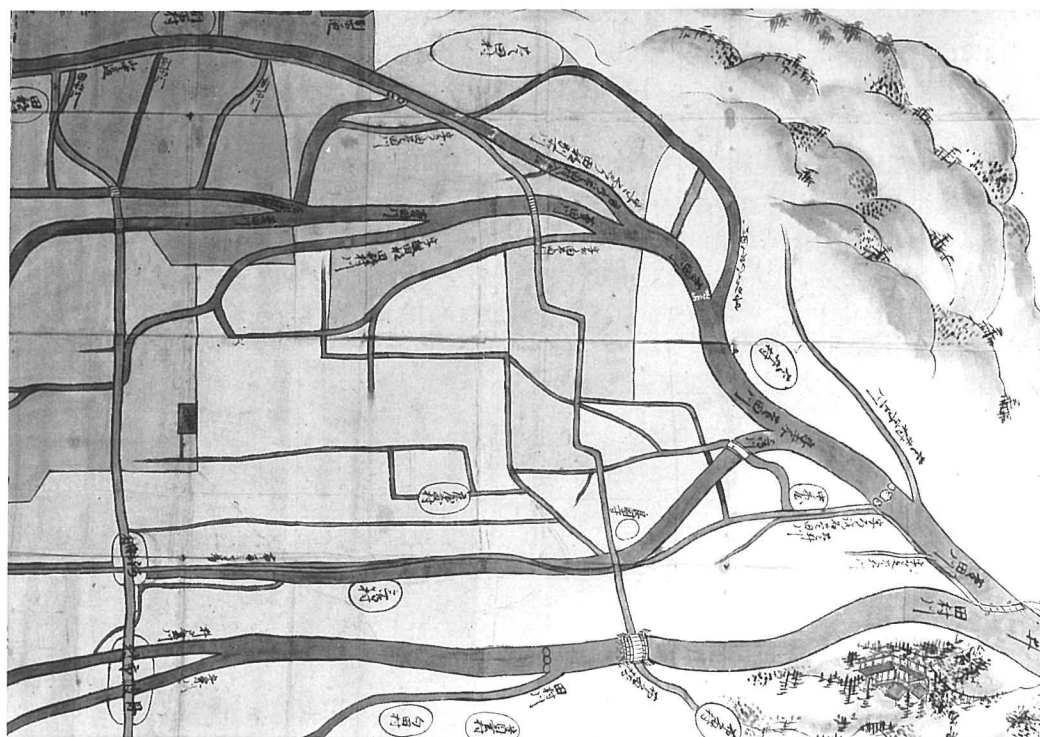
注(2)『布留川流域の水利慣行』天理参考館編

注(3)菅田町片岡保氏、豊田町木田利一氏談による。

注(4)勾田町中西勇氏、田町日野武春氏談による。



▲布留川字「一ノ井」の分水石



▲布留川の水利絵図(天理市豊田)〔上が北にあたる〕

## 溜池と水利慣行

徳田陽子

奈良盆地は古くから溜池による灌漑が多かった。少ない雨量をできるだけ有効に活用するために、雨水や川からの引水で溜池に貯水しておいて、稲作にとって水が必要な時期に備えた。

奈良盆地の溜池は、小規模で池の深度も浅く、「大和の皿池」と呼ばれている。馬見丘陵の個人所有の小さな溜池は「坪池」と呼ばれているほどである。これは、溜池の築造を単独の村落か、あるいはいくつかの村落共同で使うために、使用する村落が中心になってその村落内の土地で池掘りをし、四方を築堤した溜池を築造した場合が多かったからであろう。三宅町伴堂の伴堂池もその一つである。伴堂池は、明治前期に、三宅町石見、屏風、三河などで溜池を築造した時期と同じ頃に作られたものである。ここでは、伴堂池について、水利慣行などを紹介したいと思う。

三宅町伴堂の伴堂池の面積は、反別3町1反7畝15歩で小規模な溜池である。伴堂が主に使用するために、村落の人達为中心になって築造した。明治18年の溜池新設に関する請願書に溜池新設の理由が書かれている。今まで水掛りが河川灌漑中心で不便だったので水田の一部を綿作に当てていたが、外国産綿花の輸入によって国内産綿花が衰退して水田への転換をせまられたこと、水田への転換により水田の耕作面積が増加するので、安定した灌漑用水の確保が必要になってきたことなどをあげている。この理由は、三宅町の他の村落でこの頃築造された溜池の場合も同じである。時代のなりゆきの中で、年来の用水確保の希望をかなえたものと思われる。伴堂池は、明治19年に完成した。伴堂の杵築神社には、伴堂池の池掘りの様子を描いた溜池築造図絵馬が奉納されている。絵馬の願主は河内国丹北郡阿保村の人であるから、池掘り人足として河内の人達が来ていたことを窺うことができる。

伴堂池は寺川から導水している。田原本町八尾の玉子井堰で三河と石見・伴堂が分水し

て、石見の長田井堰で石見四分、伴堂六分の割合で分水し八丁川を通して伴堂池に導水している。八尾には、通水料（ひつつき料）を支払っている。

次に、伴堂池の水利慣行を、順を追って書くことにする。ただし、これは昭和34、5年頃までのものである。現在は、溜池と吉野川分水の両方を用水として使用しているので、昔ほど厳しく水利慣行は行われていないという。3月、月のかかりに池の樋の修理を村人が共同で行う。

月末、第1回目の水込めをして、池の満水時の七分ぐらいまで水を溜める。

4月末、池に、大和郡山市の金魚の養殖業者が金魚を入れる。

5月中頃、第2回目の水込め。満水にする。以後、雨が降って大川（寺川）の水が増水したときや、水田に配水して池の水が少なくなったときには何回も水込めをする。

25日頃、ツユハリ（この辺では用水路のことをコツユという。コツユの埋もれた所などを修理する。）

6月20日頃、植付水<sup>うしより</sup>を田に配水<sup>ひづき</sup>する。伴堂池には、良樋・坤樋・乾樋・泥拔（樋）の4個の樋がある。名称のとおり、溜池の東北に良樋、西南に坤樋、西北に乾樋があり、これらの3個の樋を一斉に使う。伴堂には7垣内がある。良樋は、まず、南垣内が1昼夜、次に中垣内が2昼夜、坤樋は、まず、南垣内が3昼夜、赤丸、南畑一緒で4昼夜、出屋敷は赤丸の余水を使う。乾樋は辻垣内が3昼夜使う。水番は2人1組で昼夜交代である。総代と水利委員が日時・水番の配置を決めた。

7月20日土用干し。土用干しは、村落全体とするのではなく各家の意志により決める。土用干しをする田は水を田から出す。土用干しをすると、耕地の養分の分解を促し、稲全体の発育を強固にし

て豊作を確保することとなる。昭和初期までは、家で食べるために鯉や鮒などを田で飼ったことがあるという。このときは土用干しはしなかった。

30日頃、田に再度、引水する。このときの水は、米取り水、米1升水1升といわれ、大切な出穂期に向けて必要不可欠な水である。

9月八朔、あるいは3日頃、田の水を出す。この時期には排水しておかなければ、イモチ病などになりやすい。

12月中旬、金魚を業者がひきとりにくる。そのとき、泥抜の樋を抜いて溜池の水を出す。かつて鮒などがいてジャコとりをしたときの名残りで、現在も「ジャコとり」とこの日のことを呼ぶ。

以上が1年間の水利慣行であるが、昭和22年の干害のときには切流し（溜池に溜めずに田に水を流す）をしたという。水不足のときには、田に通常の6分ぐらいしか水を入れないこともあったという。しかし、村人は、水番を信頼しているので争うことはなかった。

それに反し、村落間では水争いがあった。『三宅町史』を引用する。

伴堂の松岡翁も石見と伴堂の水争いで村の太鼓が鳴り、竹槍をもって集ったのを見ておられる。

水利慣行は、農村共同体を円滑に運営するためであると共に、他村とのまきつを防ぐためでもあった。それが、昭和34、5年から徐々に簡略化されていったのは、兼業農家がふえ稲作中心でなくなったことや水番をする人が限られてきたことなどのためである。さらに約10年後には、吉野川分水も利用できるようになり、水不足が解消されたからである。

溜池への第1回目の水込は一般には1月から2月にかけての寒水を導水することが多いが、伴堂では3月末に導水する。このように村落により、多少、水利慣行は異なる。

通水料・水番の人足費・修理費などに使う水利費の負担を少しでも軽減するために、溜池を金魚の養殖業者に借すことは、伴堂の場合、戦前から行ってきた。このように、溜池を灌漑用水としてだけでなく有効に活用したのである。

末筆ながら、聞書に協力して頂いた三宅町伴堂の総村浩、広瀬秀治郎の両氏に感謝いたします。



◀溜池築造図絵馬  
(三宅町伴堂 杵築神社)



▲伴堂池



▲伴堂池の碑



# 雨 乞 い

横山 浩子

京都相国寺の塔頭鹿苑院の代々の記録である『鹿苑日録』慶長九年（1604）の記事に、

五月廿四日、自朝晴天、欲移青苗無水、此節如此旱魃予覺廿年来無之、古今初也、農夫愁□□此節□□天所与、何足嗟嘆、呵々無念事。

廿六日、自朝晴天、如此炎魃邇来初也、青苗不移、各々百姓枕畝、終夜不歸家、艱難無過此節。

廿七日、自朝晴天雨不降、各々辛勞不限昼夜、横未広野、農夫亦不歸家、家広野、農夫亦不歸家、家広野枕石者、無如此時、行末不知、旱魃是亦天所命也、何足嗟嘆

（中略）

六月十五日、自朝晴天、昨暮、寺庵、社人、經所衆、百姓、各々抽丹誠、仰天伏地、雖乞雨終に雨不降、却て炎天殺人而已、□□水一滴無之、百姓不堪愁（下略）とあって、当時の旱魃時における農民の困窮の様子をうかがうことができる。

水は、個体としての生命の維持に不可欠であるというのみでなく、私達日本人にとっては、その生活を支える基盤とするところの、稲作農耕の必須の条件である、という二重の意味において、その生死をつかさどってきた。

とくに灌漑、水利施設の整備が不十分な段階において、全ての水の源である雨は、まさに天の恵みであって、これを望む心には、今日よりいっそう切実なものがあつたと思われる。

西大寺の寺務日誌である『西大寺日記』元禄十三年の記載では、

（六月）廿二日晴天、小風芝村庄屋年寄雨請之祈祷役者方へ参候。

廿三日晴天、池水ノ儀ニ付庫坊村ト芝村口論有之、自芝村水ヲ（下略）

廿四日晴、右池水之事北村役人共村役人マチ色々託言有之、故又水ヲ前日刻之通ニ出ス

廿五日晴天、奥院同誦ノ次手雨乞相談有之、

廿七日晴天、龍王於宝前雨請之祈祷轉読大船若有之、候寺中ノ僧侶不残出ッ

卅日曇天風烈シ、朝五ツ時分止雨足ル程不降、其故小村ニハ諫踊致候

のように、この当時の旱と、この旱災下にあった芝村（現奈良市西大寺芝町）の様子を刻々と知ることができる。

これ以後も七月三日の条に「大乘院□之集会有之、次に請雨之相談有之、請雨經二十一部仁王經サ五部同斷愛染法百座三色御内□入候へ、愛染法百。立願仕候、同晩芝村百姓共諫踊、寺へ五人組々頭請雨ノ願ニ参候」同七月十七の条「七ツ時分小雨有之、芝村ヨリ明王江千燈之立願、今日六ツ迄、限立願不成就、亦百姓共不残雨請之願ニ来ル」、同二十一日「芝村庄屋年寄役者江参り、旱災之難キ申様餘り雨フリ不申色々御立願等被遊下候得共、其甲斐も無御座候間、今晚ハ本堂ヲ借り百姓不残通夜」とあり、水の必要な時期に降雨がなければ水争いもおこり、そのような中で雨



▲『西大寺日記』（奈良市・西大寺蔵）



▲吐山の太鼓踊（都祁村吐山）

乞いが繰り返されたのである。

\* \* \*

稲の育つ過程で生じる恐れのある、様々な災い——虫害・旱魃・風害等に対して人々はその除災祈願を行ってきたが、その中でも旱災に対する雨乞いは、県下においてもいたるところでその伝承を聞くことができ、かつその方法は実に多様である。

また祈願は雨が降るまであくことなく行われ、それも同じ方法を繰り返される場合もあるが、さきにあげた『西大寺日記』の中にも見られるように、さまざまな方法で試みられることも少なくない。

たとえば都祁村吐山では、神社への砂持ち、池の清掃に始まり、五百提灯の奉納、千燈明、一万燈明の奉納と順次願掛けが大がかりなものとなっていたが、その中で、一番大儀なものとして太鼓踊りが踊られた。またこの雨乞い祈願の踊りの前には、各垣内ごとに定めたダケ山に登り、山頂で柴を焼き、太鼓を打ちならす。「雨たんもれたんもれや」と連呼しながら下山する、ということが行われた。

この太鼓踊りは、雨乞いの願がかなったときには、お礼としてよりいっそう華やかに踊られたという。

雨乞い、あるいはその願満時に太鼓踊りが奉納された、という例が多いのも奈良県の雨乞いの特色といえる。

今ではその伝承も途絶えつつあるが、幸い古記録や文書、歌本、使用された用具、さらには神社等に奉納された絵馬などからその様子を垣間見ることができる。

下に写真を掲げた耳成山口神社の絵馬もそうしたものの一つである。

墨書に「奉掛／文久元<sup>(1861)</sup>歳／雨請満願」裏面には「絵師八木／茶屋清兵衛」「細工人／小綱村／戸屋／半兵衛」とある。

また、画面中央に立つ六本の旗には、向かって左より、北八木村・石原田村・葛本村・常盤村・新賀村・木原村という文字が見られ幕末、これら七村によって踊りが奉納されたことを知ることができる。

\* \* \*

以上にあげたような例はほんの一部にすぎないが、このように多様な雨乞いの方法が行われたのも、人智を尽くしてなお及ばず、日一日と危機感の高まる状況の中で、なおも水を求め続けた当時の人々の心の表われと見ることができる。



▲太鼓踊図絵馬（橿原市・耳成山口神社蔵）



# 弁財天への信仰

—信仰の変遷と多様性について—

奥野義雄

弁財天が水神として崇められ、信仰されてきたという伝承が今日消滅してしまっている状況にある。弁財天の祀られている場所に池がある、あるいはあったという現実がかろうじて弁財天と水とのかかわりを想定させてくれる。だが、今日の弁財天つまり弁天さんに関する信仰の伝承は、かならずしも水神を推察させるものではなく、むしろ芸能神として信仰され、そして商いの神として崇められてきたものである。

古くから弁天さんと親しまれてきたこの神が水神として信仰されてきた痕跡は、単に宗教学の学問領域のことであろうか。すなわち、石田尚豊『両界曼荼羅の知慧』にみる「弁財天」の項に、

辨才天 (saras Vati) は妙音天、大辨功德天と稱され、ヴェーダ神で、はじめ河川を神格化した女神で、収穫の豊穰を願う農業神でしたが、ついで梵天の妃となり、河の流れの音や梵天と関連して、言語や音楽の神に転じ、ついには財福の神としてひろく尊崇されるようになりました。

とあり (傍点一奥野)、弁財天の転身していく姿が窺える。また、この転身は単に〈神〉そのものが転身していったことを物語るものではなく、その信仰者の欲求が大きく反映していたことを暗示させていると考えられる。

このように弁財天にかかわる信仰を解きあかしていくに際して、この〈神〉がいかなる神として崇められてきたかという信仰の変移を辿ってみることが、神 (あるいは仏) 一信仰一人を結びつけ、一つの信仰に関する文化

の変遷を知る手掛りとなることはいうまでもないことであろう。

このことはともかく、さきの石田氏の弁財天にかかわる変移を、大雑把であるが、時代的背景とともにみると、

弁賄天＝水神 (古代～中世前半)

- ←梵天の妃となることで技芸神として信仰される基盤をつくる。
- ←浄土思想の影響をうける。※

弁財天＝技芸 (芸能) 神 (中世後半)

- ←七福神の思想の成立により財福神の基となる。

弁財天＝財福 (商い) 神 (近世)

という変遷をたどり、その時代々々の社会的要求を弁財天信仰に盛り込んでいったと推定し得る。

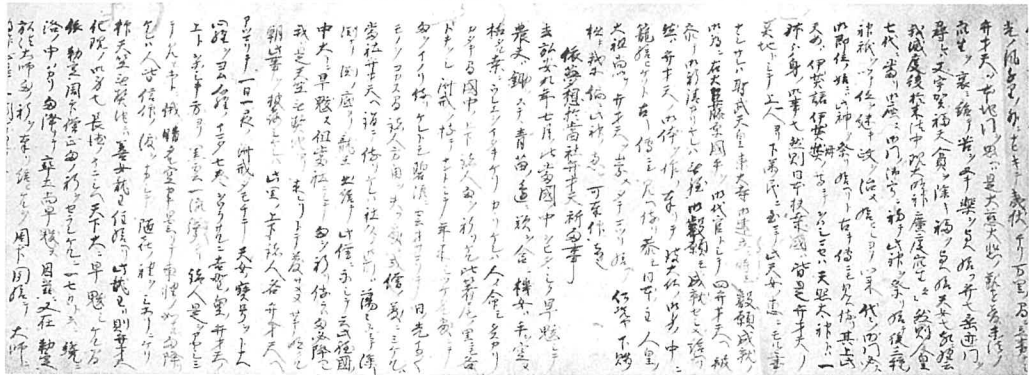
※この浄土思想とのかかわりは後述する『瑞夢記』の説話にみえるので、詳しくは後に記載する。

また、この欲求はその時代や社会状況によって大きく変化することも付け加える必要もあり、欲求内容が性急で現世利益を主たる目的としたことも推察できよう。

この推察の基盤となった伝承資料や文献史料について、次に触れることによって、この推察の一端を史実として考えることができるのではないかと思っている。

\* \* \*

奈良市伏見町にあった弁財天社は池のそばにあったが、現在はこの社もなく、安置されていた弁財天の神像は、奈良市押熊の常光寺で保管されているということである。かつて、池の近くに祀られていた伏見町の弁財天につ



▲『瑞夢記』(大福寺蔵)

いての信仰は絶えたのか、古老からは聴き取れなかった。同様にして、奈良市あやめ池南の養股池のそばには、弁財天社があるが、これに関する信仰についての話は聞かない。

さらに、奈良市中院町の元興寺境内に弁財天社が祀られているが、かつてこの寺院が復興される以前には、現在の社のやや北側に池があり、この池の中の島に祠があって、ここに弁財天が安置されていたという。そして、その往時には、この弁財天社に詣る姿もあったようである。しかし、この神に何を願って詣ったものかは明らかではない。

このように弁財天と池（淵）とかかわりをもつ一方、広陵町箸尾の櫛玉比女命神社内に祀られている弁財天社に関する伝承から、その信仰内容が村内の安全や家内安全、そして商売繁盛を願ったものであることが窺えた。ただ、この弁財天信仰が盛んであったのは、同神社宮司の中川善之氏の先代から聞いた話であり、大正年間以前の状況であったことが想定され、この弁財天社が同神社に明治時代に移されたとも、江戸時代に移されたともいわれ、同神社とのかかわりはさだかでない。

しかし、同神社の近くにある大福寺にも、この弁財天社の伝承があり、大福寺住職の加藤泰龍氏によると、かつて大福寺境内にこの社が祀られていて、この弁財天社に関する説話記録が久しく同寺で保管されているのである。

元来、この弁財天は「箸尾満嶋弁財天」と称され、この弁財天にかかわる鎌倉時代の話を書き集めたものが『瑞夢記』と呼ばれる説話・靈験記である。

この『瑞夢記』の発見の経緯は省略するが、同記には、

弘安 当所氏人僧侶等評議シテ 奉勧請天河之弁才天 并任夢想定云々 (下略)

とあり、さらに「自弘安四十八年以後 箸尾七代目為長法名実空之時代也」とみえ、鎌倉時代作成のものであることがわかる。そして巻末には「于時 文安元年<sup>(1441)</sup>甲子八月五日書寫軍」とあり、この年に元の『瑞夢記』から書き写されたことも窺える。

このことはともかく、この記には、弁財天が龍神として、祈雨の神として往時の人々によって信仰されていたことが、「依夢想於当社弁才天祈雨事」の項で知るこのができるの

である。この祈雨によって弁財天が雨を降らせたという語りであるが、箸尾の里の農民の旱魃に対する苦しみを救った「弁才天化現の御身」であった善女龍王＝龍神が天河の坪内弁財天ともかかわることも明示している。

このように弁財天が龍神として崇められ、「人皆信仰の涙をながし」たことは、単に説話の中だけの話し、としてだけでなく、往時の弁財天信仰の在り方を暗示するものであろう。

このことは、弁財天信仰が単に龍神＝水の神としてとどまらず、極楽往生を願った人にとって、浄土へ導く〈神〉として崇められたことを、「信經房祈往生事」という説話から窺うことができるとともに、鎌倉時代以降における弁財天信仰の多様性を想定しないわけにはいかないであろう。

このように弁財天の信仰をみるかぎり、大和の場合、すでに水の神としての弁財天の信仰は薄れ、言い伝えとして水の神（龍神）＝弁財天という関連が残存しているのみになっていることが窺える。ただ、遠く中世において、史料から水の神と弁財天が結びつくことを知る。これが大和の弁財天信仰の姿であるが、他府県においては、雨乞いに弁財天へ詣った事例や祈雨のために弁財天を勧請し池中に祀っている事例、さらに雨乞いを願い弁財天の祠のある池をさらえた（池をさらえると雨が降ると言い伝えられていた）事例などがあると紹介されている（高谷重夫「雨の神とその司祭者」、『雨乞習俗の研究』所収）。

このように雨乞祈願のために弁財天に祀るという習俗が現存あるいは近年まであったということを窺うかぎり、弁財天＝水の神としての信仰が雨乞いの祈願、において生き続けてきたことが理解できる。しかし、これに對して、大和においてはいかなる事由・状況によって、弁財天＝水の神→雨乞祈願の実態が消え去ってしまったのが課題として横たわっている。この課題を解きあかす民俗資料や文献史料を、現段階では見出すことはできないが、今後のたんねんな資・史料とりわけ文献史料（地方文書）の調査によって近世から近代にかけての弁財天と水の神との結びつきとその信仰を見出し得るのではないだろうか。

(1985. 9. 9了)

# 箸尾の弁天さん

奥野義雄

現在、弁財天すなわち弁天さんを祀り、信仰されているところは少なくなっている。

奈良市域で弁天さんを祀り、信仰されているところを挙げると、奈良市餅飯殿、同市東向、同市中院元興寺などである。これらの弁天さんは七月七日か、七月十七日に弁天さんの祭りが行なわれ、今日も盛んである。しかし、他の地域では、盛大に祭りが行なわれるところは少ないであろう。ただ、弁天さんの最初のものと言いつたてられてきた天川村坪内の弁財天社は、さきに挙げた弁天さんの祭りよりも盛大であるが、これを除くと、<sup>〃</sup>弁天さんのお祭り、は数少ないであろう。

しかし、かつての盛大さを伝承しているところとして、広陵町箸尾の満嶋弁財天社と呼ばれる所謂<sup>〃</sup>箸尾の弁天さん、であろう。この箸尾の弁天さんについて、地元の古老の話をとりまとめて、弁天さんの祭りとその信仰について次に紹介することにしてしよう。

\* \* \*

この箸尾の弁天さんは、すでに触れたとおり、元来<sup>〃</sup>「満嶋弁財天」として箸尾（的場）の大福寺と同（南）・櫛王比女命神社では伝えられてきた。

そして、大福寺には、この弁天さんの信仰にかかわる説話を集めた靈験記である『瑞夢記』が保管されていて、古く鎌倉時代には、この箸尾の里の人々は弁天さんを龍神＝水の神として信仰していたことが同記から窺うことができるのである（『瑞夢記』については本誌「弁財天への信仰」に記述したので参照されたい）。

しかし、この水の神としての弁天さんの信仰は、今日の伝承からはほとんど窺うことができないほどである。ただ、その後に付加された信仰内容である、<sup>〃</sup>商売繁盛、を祈願する神として弁天さんが信仰されていたことを知る。

また、この商売繁盛を願うとともに村人全員の安定や村人個々の家内安全を祈る対象の神として弁天さんが信仰されてきたことがわ

かるが、このこともすでに60～70年以前の信仰の状況であったということも古老から窺うことができた。ただ、この古老の話から弁天さんが<sup>〃</sup>「農耕の神」と思われていたことも、ここで付け加えておきたい。その理由は、弁天さんの神像とともに祀られている十五童子や牛車に積まれた俵や牛・馬、そして弁天さんの持つ用具から「農業」が想定されたいということである。宗教の教理を繙くまでもなく、直感的に弁天さん＝農耕神と想像し



◀ 弁財天像版木  
（広陵町箸尾・南、櫛王比女命神社）



▲ 満嶋弁財天像（櫛王比女命神社内弁財天社）



▲ 大福寺（広陵町の場）

たのであろうか。このことは明確に聴き取ることはできなかったが、この満嶋弁財天が「昔から箸尾の弁天さんと言われ、箸尾の村の人々はもちろん、近郷近在の人々が毎年七月七日の弁天さんの祭りには詣った」という盛大さであったことを聴くことができた。

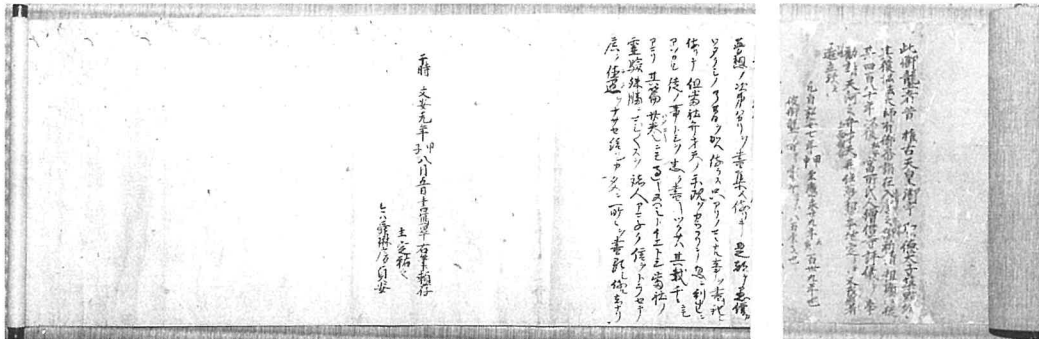
ただ、この弁天さんの祭りがいつ頃まで盛んに行なわれていたかは明らかではないが、60～70年以前のことであったということであり、その当時の祭りには、屋台（立ち店）が鳥居のあるところから境内まで立ち並んでにぎやかであったということを知ることがあるとのことで、往時の「箸尾の弁天さん」の盛大さが偲ばれるようである。

この盛大さも、かつての水の神として崇められていた弁天さんへの信仰ではなく、商売の繁盛を祈り、村人や家内の安全を願って詣った農村の人々の弁天さんへの信仰であったように思える。

\* \* \*

したがって、古くは江戸時代の村人や新しくは明治時代から大正時代にかけての村人が弁天さんに求めた祈願成就の姿は、中世以前にみられた龍神＝水の神としての姿ではなかったがために、水とかかわる弁天さんへの信仰を多くの伝承からは捉えることができなかったのではないかと推察し得るのである。

(1985. 9. 7了)



▲「瑞夢記」前文と奥書

★★★★★ お し ら せ ★★★★★

● 民俗博物館の行事予定

☆S 60年10月3日(木)～11月24日(日)  
特別テーマ展「水と生活—大和の水の歴史—」

◎ 特別講演

- 10月27日(日)午後2時より  
「農耕と水の歴史」  
—江戸時代の吉野川分水の企て—  
講師：奈良県立図書館長 広吉寿彦氏
- 11月10日(日)午後2時より  
「大和の水利について」  
講師：奈良文化女子短期大学名誉教授  
理学博士 堀内義隆氏

(講演はいづれも約2時間程度)

☆S 60年12月14日(土)午後1時より  
体験学習「シメナワつくり」

【表紙説明】

農耕にとって夏場の水の確保は大変な苦勞であった。そのために農村内あるいは村外の間で所謂「水争い」がしばしば起った。

この水の確保と村内の各自の田に水を分水するにも、「村の掟」があり、分水するために流水時間は守られてきた。この時間を計るための用具に「時香盤」（香時計とも呼ぶ）があり、これを水守りの人が使ったといわれる。

■ 編集後記 ■

うだるような暑さが続いた8月。この暑さが9月上旬まで持ち越され、残暑というよりも盛夏を感じさせた。公園の樹々もグッタリするほどの猛暑であった。

しかし、9月も半ばになって風物にも秋のいろあいが現われはじめ、朝夕もめっきり涼しくなりつつある。凌ぎやすい日々へ移っていく中で、空も秋の彩に変化しつつある。

この自然の大きな変化を受けて人も物も、この変化に余儀なく変っていく。ある樹木は枯れ、ある草木は葉を落して自らの生命を保守する。陽の照り返えしが薄くなっていく頃には、変化した段差もまた少しずつ縮まることであろう。 (☆)